

博士學位論文要約

論文題目： 花田清輝・後期歴史小説研究——非暴力主義の探究——

氏名： 加藤 大生

要約：

本論文は、花田清輝が昭和 35 年以降に執筆した、一連の歴史小説を論じるものである。特に、そこにおいて表現された非暴力主義の問題に焦点を当てる。

花田清輝は、戦後復興期における文学運動・芸術運動の主要な担い手の一人であり、戦後文壇のみならず、絵画や映画などを含むさまざまな芸術領域に少なからぬ影響を与えた存在として知られる。批評家としての活動を主としていた花田であるが、同時に彼は、日本の歴史に材を採った小説群の執筆にも力を傾注した。本論文では、花田における歴史小説の創作に着目し、個々の作品の具体的な読解を通じて、作家の思想的な内実とその可能性について検討した。

従来の研究史では、戦後から昭和 35 年頃までの花田の批評活動に、主に着目がなされてきた。一方で、昭和 35 年以降、作家の死の直前まで書き継がれた歴史小説群について詳細に論じたものは、管見の限りほとんど見当たらない。しかし、花田がそのキャリアの後期に重点的に取り組んだ歴史小説の創作は、作家の思想的営為について考えるうえで、無視することができない重要な試みである。

花田の歴史小説における重要なテーマの一つが、「非暴力の伝統」の探究である。本論文では、特にこのテーマに着目する。一連の歴史小説の創作を通じて、花田は自身の非暴力思想を練り上げていった。これまで、花田の述べる非暴力主義とは、言葉やレトリックを武器に闘争する知識人の姿勢を表現したものとして解釈される傾向が強かった。しかし、花田の考える非暴力は、そのような形象のみにとどまるようなものではない。たとえば、デモやストライキなど、集団的な運動として生起する非暴力的積極行動にもまた、花田は極めて重要な意義を看取している。現況を変革するための革命的な行動へと人びとを駆り立てるような、潜在的な力の水準を触知することが、花田の非暴力主義においては企図されているということを指摘した。

花田が「非暴力の伝統」を問う際、重要なのは、それが同時に既成の歴史認識の批判的な検討にもなっている、ということである。暴力同士の闘争によって規定された歴史を解体し、そこにおいては不可視化されている「非暴力の伝統」を抽出するための戦略が、花田の歴史小説では問われている。したがって、本論文の分析は、花田の非暴力主義の内実を詳らかにすることだけを目的とするのではない。花田における歴史認識・歴史叙述の分析も、同時並行的に展開していく。特に同時代の〈実証主義的歴史学〉／〈マルクス主義的歴史学〉に対する批判意識を作品から浮かび上がらせることにより、花田の小説がもつ歴史認識・歴史叙述の特性についても論及した。

具体的な対象として、本論文では、『鳥獣戯話』（昭 37・2・25、講談社）、『小説平家』（昭 42・5・10、講談社）、『室町小説集』（昭 48・11・8、講談社）の三つの小説集を取り上げ、そこに収められた諸作品の精読をおこなった。

分析に際しては、三部八章構成をとる。第Ⅰ部では、花田が戦後になって初めて発表した小説集である『鳥獣戯話』を検討した。

第一章では、「群猿図」（『群像』昭 35・6）を取り上げる。武田信玄の父、信虎の半生に取材した本作は、信玄による信虎追放事件をめぐる解釈の歴史を辿りながら、この人物の特異性を独自の仕方で浮かび上がらせる。猿の群れに執着する信虎の思考とともに描き出される集団性のさまざまなタイプについて、この時期の花田の論争などにも目を向けつつ、分析した。そのうえで、俳諧連歌において表現される集団性のありようを、花田の目指す共同制作の理念と重ね合わせながら考察した。

第二章では、「狐草紙」（『群像』昭 36・6）を取り上げ、この作品が提示する歴史観の内実について論じた。「良質の史料」を重視する同時代の歴史学の言説を批判的に引用しつつ、「目撃者の証言」を称揚する本作の歴史観は、小説内に描かれる「狐」の形象に注目することで、より具体的なかたちで意味づけることができる。文字史料に対する花田の考え方や、彼の提唱する芸術論・リアリズム論を補助線としつつ、作品の読解を試みた。そのうえで、既存の〈マルクス主義的歴史学〉が問い直される時代状況のなかで、それとは異なる〈偶然〉を契機とする歴史認識の回路を示したものとして、この作品を価値づけた。

第三章では、「みみずく大名」（『群像』昭 37・1）について検討した。ここでは、作品から読み取ることのできる史料批判の姿勢を、「ドキュメント」と「フィクション」を対立させる花田の認識を援用しながら整理した。加えて、カルモナという虚構の人物の形象について分析し、そのような「観察」者が設定されていることの意義を明らかにした。そのうえで、信虎の晩年における身振りが、過剰な暴力性によって暴力自体の内破を企てる、特異な暴力批判となっていることを指摘した。

続けて、第Ⅱ部では、『小説平家』に所収の諸作品を取り上げる。とりわけ、①『平家物語』という一種の歴史叙述を対象に据えることの意味、および、②暴力による支配に抵抗する実践の分析、という視座から、ここでは二つの作品を分析対象として選定した。

第四章では、特に①の視座から、「冠者伝」（『展望』昭 40・12）を取り上げ、『平家物語』の作者について考証的推理を展開する本作の批評性を論じた。戦後の『平家物語』をめぐる言説空間のなかで本作を読むことによって、「冠者伝」が提出する作者主体の具体的なありようを明らかにした。同時に、「国民文学」や「大衆文学」をめぐる同時代の問題系のなかで、作者の位置を問い直すことの意義についても論じた。

第五章では、②の視座から、「大秘事」（『世界』昭 41・10）を取り上げ、特に作中に描き出された「敗北主義の哲学」に焦点を当てて考察した。この小説は、『平家物語』の「大秘事」とされる「剣の巻」を手がかりに、暴力中心の歴史認識が形成されていくありようを辿りながら、そこに別の歴史を重ね書きしていく。剣振丸や後鳥羽院、老松といった登場人物たちの形象を具体的に検証することで、暴力による支配の現実のただなかで、それぞれがどのような身振りを選び取っているのかを分析した。そのうえで、剣振丸による「敗北主義」の実践を、暴力／対抗暴力の循環構造に内在しながらも、暴力の論理とは異なる

力の活用術を模索する一連の営みとして位置づけた。

さらに、第Ⅲ部では、『室町小説集』に所収の諸作品を取り上げる。ここでは、①室町時代（特に後南朝）を歴史叙述の対象に据えることの意味、②暴力の歴史のなかから非暴力の理念を取り出す方法、③非暴力主義と運動論の結節点、という三点について、とりわけ検討していく。この問題意識のもと、『室町小説集』からは三つの作品を分析対象として選定した。

第六章では、①の視座から、『吉野葛』注（『季刊芸術』昭45・1）を論じる。谷崎潤一郎『吉野葛』（『中央公論』昭6・1～2）に「注」をつけるという本作の身振りについて分析することで、後南朝／吉野という時間／空間を取り上げることの意味を考察した。「史実」と「伝説」が識別不可能になり、単線的な歴史認識のモデルが瓦解するような瞬間を、『吉野葛』注は、文学作品のエクリチュールが有する政治性を強調することによって捉えている。

第七章では、②の視座から、「画人伝」（『群像』昭46・1、原題「室町画人伝」）を取り上げる。本作は、作中に二種類の非暴力が描き込まれているという点で特徴的である。同時代言説と照らし合わせることで見えてくるのは、「画人伝」の非暴力思想が、暴力に抵抗するための潜在的な力の領域を開示しようとするものだということだ。同時に、虚構の画家の伝記を書くという体裁をとる「画人伝」の方法も、そうした非暴力的抵抗の力能を掴み取るという企図との結びつきにおいて意味づけることができる。暴力の歴史のただなかに非暴力の理念を知覚しようとする本作の戦略について考察した。

第八章では、③の視座から、「力婦伝」（『群像』昭48・8、原題「室町力婦伝」）を取り上げ、同時代的な地域闘争や住民運動とのかかわりを意識しつつ読解した。まず、本作に描かれた小川弘光の形象を分析し、そこに表現された管理権力の具体相を析出した。そのうえで、弘光の統治から逃れ去るものとして、山邨御前の態勢を位置づけた。「主婦」と「力婦」の二重性において特徴づけられる山邨御前の「わわしい女」という表象を起点に、本作は同時代的な運動の問題系と切り結ぶ。「新しい社会運動」が生起する時代のただなかで、運動のダイナミズムに巻き込まれるようにして書かれる本作の批評性を分析した。

上述の作品分析を通して、花田の非暴力主義が有する特性について論じた。そこから確認されたのは、暴力に対して抗うための非暴力の実践が、作品ごとに、さまざま異なる戦術として変奏されていくその様相である。花田の非暴力主義は、一枚岩的なものでは決してなく、複層的な性格を有するものとして提示されている。複数の歴史小説を一作品ずつ精読していくことにより、花田の非暴力主義が有する豊かな批評性を明らかにした。

花田の述べる非暴力主義が、単に言葉を武器に闘う知識人の姿勢をあらわすものにとどまらないことも、上述の分析を通して理解される。集団的な異議申立ての運動、非暴力的積極行動としてのデモやストライキを生起させる潜在的な力の水準が、花田の非暴力思想においては重視されていた。

そのような潜在的な力を知覚することは、同時に、既成の歴史認識の批判的な解体作業を要請する。花田にとって、文字史料によって構築される歴史＝正史とはすなわち暴力による闘いの歴史であり、その勝者による支配の歴史以外の何ものでもなかった。そして、そのような歴史認識の枠組みに対する批判は、花田の創作において一貫するものであった。

暴力にまみれた歴史のなかで周縁化され、抑圧され、あるいは不可視化されてきた者たちによる非暴力的抵抗の力能を剔出することが、花田の歴史小説においては試みられていた。同時に、そのような力を知覚するための新たな歴史認識を練り上げることが、花田の歴史小説における主要なモチーフをなしていた。

暴力の歴史のただなかに非暴力の理念を知覚する花田のテキストに散見されるのは、いわば、分裂的・複眼的な思考のシステムである。これは、花田の思考法を特徴づける表現としてしばしば述べられる「楕円」、あるいは「対立物を対立のまま止揚する」という特異な弁証法と接続するものとして位置づけられる。この思考法は、単なる相対主義ではない。対立する二つの極＝二つの焦点のあいだを絶えず往還しつづけるダイナミックな運動性こそが、花田の思考法を特徴づけるものである。本論文で取り上げてきたテキストにおいても、花田は二項対立的な図式を好んで採用していた。そのような図式化において目論まれているのは、単に両者の関係性を相対化することではないし、両者の優劣関係を逆転することでもない。両者を係争的な状態に置き、そのあいだではたらく力の関係性を認識することこそ、花田の思考の特質は見出される。暴力的なものの中に非暴力的なもののあるわれを見ること、同時に、非暴力的なものの中にも暴力的なもののあるわれを見ること。そして、そのような力のありわれを可能にする潜在的な領域を注視することが、花田の非暴力論を特徴づけていた。

この意味で、花田の非暴力主義は、単に暴力一般を拒絶するような姿勢とは一線を画す。実際、暴力をただ嫌悪するだけでは、批判的思考を練り上げることはできない。たとえば近代国家の最もミニマムな定義は、それが暴力を独占しているということであり、無造作な暴力嫌悪は、国家暴力以外のすべての暴力を違法なものとして取り締まる支配的イデオロギーと見分けがつかないからである。単なる暴力嫌悪や無抵抗主義に還元することのできない花田の非暴力論を特徴づけているのは、それがあくまでも暴力の現実を注視し続けるものだということである。非暴力主義の探究は、暴力的なものを性急に排斥するのではなく、むしろ逆説的に、暴力的なものの駆動する現場に徹底して踏みとどまるところからはじめられる。花田が「非暴力の伝統」を探究するなかで問うていたのは、ともすれば暴力という形で発露しかねないような潜在的な力を、いかにして暴力的でないやり方で運用するのか、ということであり、さらに、いかにしてその力を革命的な方向へと整流するのか、ということであった。歴史とは、花田において、そのような力の活用術の「伝統」を模索し、実験するための場に他ならないことを指摘した。

また、上述の分析を踏まえつつ、本論文では、このような非暴力の思想が有する現代的な意義についても論及した。凄惨な暴力が多様な仕方ではびこる現在、花田が支持したような非暴力の大規模デモはグローバルな広がりをもって展開されている。そのような異議申立ての運動をより一層賦活するための理論的枠組みを、花田のテキストから引き出すことが可能である。花田を再読することの意義を、非暴力主義の分析という視角から強調した。

以上、本論文では、一連の歴史小説の読解から上述の議論を展開し、そこで練り上げられた花田の非暴力主義の理路と実践について明らかにした。

【主な引用文献・参考文献】

- ・『花田清輝全集』全一五巻・別巻二巻（昭52・9・16～昭55・3・28、講談社）
- ・粉川哲夫『主体の転換』（昭53・8・1、未来社）
- ・小川徹『花田清輝の生涯』（昭53・11・1、思想の科学社）
- ・岡庭昇『花田清輝と安部公房——アヴァンギャルド文学の再生のために——』（昭55・1・21、第三文明社）
- ・『花田清輝の世界』（昭56・3・25、新評社）
- ・野口武彦『作家の方法』（昭56・4・17、筑摩書房）
- ・桂秀実『花田清輝 砂のペルソナ』（昭57・2・10、講談社）
- ・高橋英夫『花田清輝』（20世紀思想家文庫16、昭60・10・18、岩波書店）
- ・好村富士彦『真昼の決闘 花田清輝・吉本隆明論争』（昭61・5・25、晶文社）
- ・関根弘『花田清輝——二十世紀の孤独者』（昭62・10・30、リブロポート）
- ・渡辺一民『林達夫とその時代』（昭63・7・14、岩波書店）
- ・石井伸男『転形期における知識人の闘い方 甦る花田清輝』（平8・2・15、窓社）
- ・菅本康之『フェミニスト花田清輝』（平8・7・25、武蔵野書房）
- ・井口時男『批評の誕生／批評の死』（平13・5・31、講談社）
- ・乾口達司『花田清輝論——吉本隆明／戦争責任／ Kommunismus』（平15・2・28、柳原出版）
- ・佐藤泉『戦後批評のメタヒストリー 近代を記憶する場』（平17・8・11、岩波書店）
- ・湯地朝雄『政治的芸術 ブレヒト 花田清輝 大西巨人 武井昭夫』（平18・5・15、スペース伽耶）
- ・立野正裕『精神のたたかい——非暴力主義の思想と文学』（平19・6・1）
- ・上野俊哉『思想の不良たち 1950年代 もう一つの精神史』（平25・3・27、岩波書店）
- ・佐藤泉『一九五〇年代、批評の政治学』（平30・3・25、中央公論新社）
- ・長原豊『敗北と憶想 戦後日本と〈瑕疵存在の史的唯物論〉』（令1・7・15、航思社）
- ・鳥羽耕史ほか編『転形期のメディアロジー——一九五〇年代日本の芸術とメディアの再編成』（令1・9・25、森話社）
- ・ジョルジュ・ソレル『暴力論』上下（木下半治訳、改版昭40・6・16～昭41・5・16、初版昭8、岩波文庫、原著一九〇八）
- ・ヴァルター・ベンヤミン「暴力批判論」（野村修訳、『暴力批判論 ヴァルター・ベンヤミン著作集1』高原宏平・野村修編、昭44・5・6、晶文社、原文一九二一）
- ・野村修『暴力と反権力の論理』（昭44・7・30、せりか書房）
- ・フランツ・ファノン『地に呪われたる者』（鈴木道彦ほか訳、昭44・11・20、みすず書房、原著一九六一）
- ・今村仁司『ベンヤミンの〈問い〉 「目覚め」の歴史哲学』（平7・2・10、講談社）
- ・ジャック・デリダ『法の力』（堅田研一訳、平11・12・20、法政大学出版局、原著一九九四）
- ・ハンナ・アーレント『暴力について 共和国の危機』（山田正行訳、平12・12・8、みすず書房、原著一九六九）

- ・富山一郎『暴力の予感 伊波普猷における危機の問題』(平 14・6・20、岩波書店)
- ・マーティン・ジェイ『暴力の屈折 記憶と視覚の力学』(谷徹ほか訳、平 16・9・29、岩波書店、原著二〇〇三)
- ・上野成利『暴力』(平 18・3・23、岩波書店)
- ・富山一郎『流着の思想 「沖縄問題」の系譜学』(平 25・10・30、インパクト出版会)
- ・酒井隆史『暴力の哲学』(平 28・2・25、河出文庫)
- ・富山一郎『始まりの知 ファノンの臨床』(平 30・7・1、法政大学出版局)
- ・ジュディス・バトラー「非暴力、哀悼可能性、個人主義批判」(本荘至訳、『現代思想』平 31・2)
- ・カール・ウィットフォーゲル『東洋的社会の理論』(森谷克己ほか訳編、昭 14・6・26、日本評論社)
- ・渡辺世祐『武田信玄の経綸と修養』(昭 18・2・10、創元社)
- ・高橋貞一『平家物語諸本の研究』(昭 18・8・18、富山房)
- ・広瀬広一『武田信玄伝』(昭 19・4・20、紙硯社)
- ・石母田正『中世的世界の形成』(昭 21・6・10、伊藤書店)
- ・遠山茂樹・今井清一・藤原彰『昭和史』(昭 30・11・16、岩波書店)
- ・永積安明『中世文学の展望』(昭 31・10・25、東京大学出版会)
- ・永積安明『平家物語』(昭 32・2・25、誠信書房)
- ・家永三郎『日本の近代史学』(昭 32・10・15、日本評論社)
- ・石母田正『平家物語』(昭 32・11・18、岩波新書)
- ・高柳光寿『明智光秀』(昭 33・9・25、吉川弘文館)
- ・村田正志『南北朝論——史実と思想——』(昭 34・6・15、至文堂)
- ・桑田忠親『信長の手紙』(昭 35・2・10、文藝春秋新社)
- ・『日本古典文学大系 33 平家物語 下』(昭 35・11・5、岩波書店)
- ・高柳光寿『長篠の戦』(昭 35・11・20、春秋社)
- ・渥美かをる『平家物語の基礎的研究』(昭 37・3・31、三省堂)
- ・富倉徳次郎『平家物語研究』(昭 39・11・20、角川書店)
- ・永井彦熊『落日後の平家』(昭 40・5・1、雄山閣)
- ・『平家物語考』(文部省内国語調査委員会編、再版昭 43・6・15、勉誠社、初版明 44)
- ・高坂好『赤松円心・満祐』(昭 45・3・25、吉川弘文館)
- ・戸井田道三『狂言——落魄した神々の変貌——』(昭 48・4・16、平凡社)
- ・永原慶二『歴史学叙説』(昭 53・11・1、東京大学出版会)
- ・尾崎秀樹・菊池昌典『歴史文学読本 人間学としての歴史学』(昭 55・3・18、平凡社)
- ・橋本朝生『中世史劇としての狂言』(平 9・5・21、若草書房)
- ・大門正克編『昭和史論争を問う——歴史を叙述することの可能性』(平 18・6・1、日本経済評論社)
- ・『平家物語大事典』(大津雄一ほか編、平 22・11・25、東京書籍)
- ・大津雄一『『平家物語』の再誕 創られた国民叙事詩』(平 25・7・30、NHK出版)